

フランツ・シューベルト | Franz Schubert (1797-1828)

- ① 夕映えに
Im Abendrot D.799 [3:13]
- ② 春の信仰
Frühlingsglaube D.686 [2:55]
- ③ 至福
Seligkeit D.433 [2:21]
- ④ 糸を紡ぐグレートヒェン
Gretchen am Spinnrade D.118 [2:26]

リヒャルト・シュトラウス | Richard Strauss (1864-1949)

- ⑤ 親しき幻影
Freundliche Vision Op.48/1 [2:25]
- ⑥ あすの朝
Morgen Op.27/4 [3:17]
- ⑦ 献呈
Zueignung Op.10/1 [1:49]

ヨハネス・ブラームス | Johannes Brahms (1833-1897)

- ⑧ あなたの青い瞳
Dein Blaues Auge Op.59/8 [1:56]
- ⑨ 調べのように
Wie Melodien zieht es mir Op.105/1 [2:16]
- ⑩ 甲斐なきセレナーデ
Vergebliches Ständchen Op.84/4 [2:04]
- ⑪ 永遠の愛
Von ewiger Liebe Op.43/1 [4:28]

團伊玖磨 | Ikuma Dan (1924-2001)

- ⑫ はる(谷川俊太郎 作詞)
Haru (Spring) [1:59]

白石敬子(ソプラノ)

Hiroko Shiraishi, soprano

室井 摂(ピアノ)

Setsu Muroi, piano

録音: 2017年10月21日 / 紀尾井ホール(東京) [ライブ録音]
Recorded: October 21, 2017 / Kioi Hall, Tokyo [Live Recording]

越谷達之助 | Tatsunosuke Koshitani (1909-1982)

- ⑬ 初恋(石川啄木 作詞)
Hatsukoi (First Love) [2:55]

小松耕輔 | Kosuke Komatsu (1884-1966)

- ⑭ 母(竹久夢二 作詞)
Haha (Mother) [1:47]

小林秀雄 | Hideo Kobayashi (1931-2017)

- ⑮ 落葉松(野上彰 作詞)
Karamatsu (A Larch Grove) [4:35]

フーゴ・ヴォルフ | Hugo Wolf (1860-1903)

歌曲集《ミノン》

Mignon

- ⑯ 語らずともよい
Heiss mich nicht reden [2:30]

- ⑰ ただ憧れを知る人だけが
Nur wer die Sehnsucht kennt [2:13]

- ⑱ もうしばらくのまの姿にしておいてください
So laßt mich scheinen [2:53]

- ⑲ 君よ知るや南の国
Kennst du das Land [5:47]

◆アンコール…… Encores

成田為三 | Tamezo Narita (1893-1945)

- ⑳ 浜辺の歌(林古溪 作詞)
Lied des Strandes [2:37]

ルドルフ・ジーツィンスキー | Rudolf Siczynski (1879-1952)

- ㉑ ウィーン、わが夢の街
Wien, du Stadt meiner Träume [3:48]

曲目解説 ■ 白石隆生

◆ フランツ・シューベルト

Franz Schubert

シューベルト(1797~1828)は、ベートーヴェン(1770~1827)とほぼ同時代に生き、古典派の巨匠を心から尊敬し、葬儀の際には墓地まで棺を担いで死を悼んだ。13歳から作曲を始めたシューベルトは、サリエリにも学び、生涯に600曲以上の歌曲を残した。彼は作曲で生計を立てられることができた最初の音楽家といわれ、市民的な親しさの中に、初期ロマン派の高い音楽性があふれている。

① 夕映えに

Im Abendrot D.799

静かで宗教的な雰囲気をもつこの歌は1824年頃にラッペの詩に書かれた。堅琴を思わせるピアノの上に、美しく表情豊かに歌われる、静けさの中にも重みのある歌曲である。

「おお、あなたの世界の何という美しさ。父よ、世界が金色に輝き、あなたの輝きが地にふり注ぎ、埃を繊細に染めるとき、雲にきらめく夕焼けが、静かに窓に注ぐ」

「私は嘆き、怯えるだろうか？ あなたと私は逡巡するだろうか？ いや、私はこの胸に、あなたの空をしっかりと抱こう。そして、この心が崩れる前に、あなたの輝きと光を飲みほそう」

② 春の信仰

Frühlingsglaube D.686

1820年に、叙情詩人のウーラント(Ludwig Uhland / 1787~1862)の詩に書かれ、民謡的な親しさをもつ、2節からなる有節形式。ピアノの左手の6連音符が、木々の葉のざわめきと、長く厳しい冬から解放された喜びの心を巧みに表している。春風のような軽やかな歌。感銘をよびおこす旋律が実に美しい。

「穏やかな風が目を覚ますと、夜となく昼となくざわめきながら、いたるところに吹きわたる。おお、新鮮な香りと響きよ。さあ、哀れな心よ、心配しないで。すべてが生まれ変わるのだから」

「世界は日ごとに美しくなっていく。どこまで華麗になつていくのか、誰にもわからない。遠くの谷間に花が咲き誇る。さあ、哀れな心よ、悩みを忘れよ。すべてが生まれ変わるのだから」

③ 至福

Seligkeit D.433

3拍子のこの歌は、レントラー(オーストリアとドイツの山岳地方の民族舞曲)の素朴さと、明るさがある。楽譜に「楽しげに」と指示があり、小品ながら、愛する恋人とともにいる喜びが、軽快に歌われる。ヘルティ(Ludwig Heinrich Christoph Hölty / 1748~1876)の詩に1816年に書かれた。

24bit High Bit +
192kHz High Sampling Rates
Recording

Total Time: 61:25
STEREO (DSD)
R-17A1037 JV

「限らない喜びが、天国の御堂に咲いている。天使や召された人たちとともに、父たちがいついたように。ああ、私もそこで、永遠の喜びを得たい！ 誰にでも優しく、天の花嫁がほえみ、竖琴と詩編が響き、皆で踊り歌う。ああ、私もそこで、永遠の喜びを得たい！」

「でも、恋人が優しくほえむから、私はここに留まりたい。眼差しが告げてくれるなら、もう悲しむことはないよ、と。そうすれば私は幸せになって、恋人といつまでもこの世にいたい！」

④糸を紡ぐグレートヒエン

Gretchen am Spinnrade D.118

シューベルトはゲーテの詩に73曲もの歌を書いているが、文豪が彼を評価しなかったのは不思議である。この長い歌は、戯曲『ファウスト』の中でファウストへの熱い想いを歌ったもので、不安な心情を巧みに表すピアノの上に、次第に感情が高まり、最後は失意に帰するという内容。1814年、17歳の時の作品。

「私の心の安らぎは失ってしまった。私の心は重い。私は心の安らぎを、もう決して見いだせない。あの方のいないところは、私にとって墓場。すべての世界が、私をみじめにってしまった。私の哀れな頭は、狂ってしまった。私の哀れな心は、張り裂けてしまった」「あの方を求めて、窓から外を眺め、あの方を追って、家の外にでる。あの方の上品な歩み。あの方の気高いお姿。あの方の口のほえみ。あの方の眼の光。そ

して、あの方の流麗で、魅力的な話し方。あの方の手の重み。そして、ああ、あの方の口づけ」

「私の胸は、あの方に引きよせられ、ああ、あの方を抱きしめ、そして、口づけを交わしたい。思う存分、身が溶けてしまうまで。私の心の安らぎは失せてしまった。私の心は重い」

●リヒャルト・シュトラウス

Richard Strauss

リヒャルト・シュトラウス (1864~1949) は青年時代から音楽ばかりではなく、文学や哲学、美学にも興味を抱き、幅広い教養を自ら磨いていった。18歳の時に作曲した歌曲「献呈」はシューベルトと同じような早熟な才能を示し、彼は生涯に渡って歌曲を書き続け、彼の創作の中で重要な位置を占めている。ワーグナーの影響を受けながらも、洗練された華麗な管弦楽法でオペラの傑作を残した。

⑤親しき幻影

Freundliche Vision Op.48/1

1900年 (36歳)、ピアバウム (Otto Julius Bierbaum / 1865~1910) の詩に書いた作品48は、全部で5曲からなる。この歌は、嬰ハ長調の属七の和音から、主調のニ長調に絶妙に転調する前奏で始まり、ピアノは一貫して同じ音型を静かに奏でる。微妙に変化する和声の響きのうえに、抑制された声が、愛する人と共有する時間をじっくりと味わうように詩情豊かに歌う。いつ

までも余韻が残る珠玉の作品である。

「私はそれを夢のなかで見たのではない。明るい真昼に目の前に見たのだ。ひな菊が咲き誇る広い野原、葉陰から見える白い家、神々しく輝いている」「そして、私は愛する人と一緒に、安らかな気持ちで、冷たく穏やかな、この白い家の中に入ってゆく。美しさに満ちて私たちの訪れを待っている。そして、私は愛する人と一緒に、美しさに満ちた平和のなかへ行く」

⑥あすの朝

Morgen Op.27/4

作品27の「四つの歌」の中のひとつで、マッケイ (John Henry Mackay / 1864~1933) の詩による。マッケイはドイツで活躍したスコットランド生まれの詩人。ピアノの静かで印象的な前奏に続いて、祈りのように美しい歌が、淡々とふたりの愛を語るように歌う。筆者は初秋のウィーンの森で、こうした雰囲気を感じる情景を経験したことがある。ピアノだけでも独立した小品であり、簡素な中にも洗練された旋律の美しさは比類がない。歌手にとって、声のコントロールとディクションの妙味を求められる、高度に音楽的な珠玉の作品である。

「そして、あすの朝、陽はまた昇る。私が歩む道の上で、この陽光が息づくなかで…幸福な私たちをふたたび結びつける。そして、青くひろがる浜辺に、私たちは静かに降りてゆく。黙って、おたがいに見つめあう。静寂に満ちた幸福が、私たちに降りそそぐだろう」

⑦献呈

Zueignung Op.10/1

シュトラウスの歌曲の中でも、最も良く知られた作品で演奏の機会も多い。早くから才能を開花させたシュトラウスは、1881年には早くも交響曲第1番を作曲して、1882年にはウィーンに演奏旅行をして自作を紹介している。この歌は1882年に書かれた。将来性に恵まれた青年の若々しい心情が、シューマン風のピアノ伴奏にのってのびのびと歌われている。最後はオペラ的な広がり、ダイナミックな響きをもって堂々と終わる。

「そう、君は知っている、愛する魂よ。私が遠く離れて苦しんでいるのを。愛は人の心を病ませる。私の感謝を受けてください！」

「いつか、酒を愛する私が、水晶の杯を高くかかげたときに、君はその杯を祝福してくれた。私の感謝を受けてください！」

「君はその中に悪霊を閉じ込めてくれた。私が昔とちがう人間となって、清らかな君の胸に沈みこむまで、私の感謝を受けてください！」

●ヨハネス・ブラームス

Johannes Brahms

ブラームス (1833~1897) は生涯にわたって声楽曲を作曲、歌曲200曲、二重唱曲20曲、四重唱曲60曲を残した。彼が最も尊敬した作曲家と言われるシューベルトや、彼を世に出した恩師シューマンと同様、ブ

ラームスの歌曲には、抒情性や詩への深い理解と愛情が色濃く反映している。古典的な書法を用い、地味ながらもドイツ精神（ウィーン精神）のもつ雄弁さや素朴さ、几帳面さを表現し、それがブラームスの歌曲全体の特徴ともなっている。

⑧ あなたの青い瞳

Dein blaues Auge Op.58/8

1873年にグロート（Klaus Groth / 1819～1899）の詩に書かれた。《アルト・ラブソディー》など声楽の力作を完成させた円熟期の作品。1節だけの歌であるが、表現力は充実した逸品である。

「あなたの青い瞳は静けさをたたえている。私はその瞳の底まで見入っている。『何を見ているの?』とあなたは尋ねる。私は癒された自分自身を見ている」「輝く2つの瞳が私を燃え立たせ、その名残がいまも痛みを残している。あなたの瞳は海のように澄み、その涼しさは海のようにつめたい」

⑨ 調べのように

Wie Melodien zieht es mir Op.105/1

1886年にグロート（1819～1899）の詩に書かれた、静けさの中に情熱を秘めた美しい作品で、同時期のヴァイオリン・ソナタ第2番のように芸術性の高い香りを放っている。「それは調べのように静かに、私の心に染みわたる。まるで春の花のように咲きほこり、香りのようにほの

かに漂う」

「でも、それを言葉でとらえ、この眼でたしかめよう」とすると、霧のように色あせて、吐息のように消えてしまう」

「それでもなお詩の韻律に、芳しい香りが隠れていて、静かな芽から、うるんだ眼が優しくよぶ」

⑩ 甲斐なきセレナーデ

Vergebliches Ständchen Op.84/4

作品84の5曲はいずれも対話風の内容で、このセレナーデも二重唱で歌われることもある。若者は好きな娘に恋を必死で打ち明けるが、娘にすげなく断られてしまうという内容。

「こんばんは、私の愛しい人よ。君を慕ってやってきた。さあ、扉を開けておくれ!」

「扉は閉まっています。入れる訳にはいかないわ。お母さんが忠告したの。あなたを中に入れたら、もうおしまいだって」

「夜は冷たく、風も身をきるようだ。ぼくの心は凍えそうだ。恋しい心も消えそうだ。お願いだから扉を開けて!」

「あなたの思いは、消えたほうがいいのよ! お家に帰ってお休みなさい。どうぞ、お休みなさい」

⑪ 永遠の愛

Von ewiger Liebe Op.43/1

1864年にヴェンツィヒ（Josef Wenzig / 1807～1876）の

詩に作曲された。19世紀的な真剣な恋愛観をもつ女性性と、幾分気の弱い青年との対話の形で描かれている。民謡風の素朴さの中に、いかにもブラームスらしい和声進行と旋律が表現豊かに歌われる。最後は女性の気高さや感動が伝わってくる名曲である。

「森も野もすっかり暗くなり、夜のとばりがおり、辺りは静まっている。明かりも、立ちのぼる煙もない。ひばりの歌声もすっかりやんだ」

「村から若者が出てきて、恋人を家に送って行く。柳の繁みを通りすぎると、2人は様々なことを語りあった」

「君が中傷をうけ、悲しみを受けるなら、僕のことで、人の嘲りに悩まされるのなら、愛は瞬間には消えてしまっただろう。僕たちがすぐに結ばれたように、雨がふり、風が吹くように別れてしまっただろう」

「娘は語った、こう語った。『私たちの愛は決して離れたりしません! 銅や鉄も固いけれど、私たちの愛はもっと強いのです。銅や鉄は打たれて形を変えるけれど、私たちの愛は誰が変えることができません? 銅や鉄は溶けるけれど、私たちの愛は永遠に続くでしょう!』」

●日本歌曲

⑫ 團伊玖磨：はる

團伊玖磨（1924～2001）は東京藝術大学作曲科を卒業、日本を代表する作曲家としてオペラ、歌曲、交響曲、童話、映画音楽等を多く残した。特に歌曲は生涯に

わたる創作の原点であり、《花の街》は戦後の明るさと平和を象徴する歌として親しまれている。《はる》（谷川俊太郎作詞）は春の喜びを歌った名曲。「天国の調子」といわれる変ト長調で書かれている。團はエッセイストとしても知られ、随筆集『パイプのけむり』には、白石敬子も紹介されている。

⑬ 越谷達之助：初恋

越谷達之助（1909～1982）は日本の音楽教育家、作曲家、ピアニストとして活躍。東京音楽学校師範科卒業。第二次世界大戦後は、青山学院高等部、大学、短大講師と専任教官を務めた。詩人の石川啄木（1886～1912）が妻節子との初恋を想って歌った詩に作曲された。昭和13年に初演され歌手の三浦環に捧げられた。

⑭ 小松耕輔：母

はるかな故郷の母を忍んで歌った、画家竹久夢二の詩に小松耕輔（1884～1966）がつけられた柔らかな曲。感傷的な中にも、温かみを感じられる。

⑮ 小林秀雄：落葉松

小林秀雄（1931～2017）は、東京府生まれの作曲家で、東京藝術大学作曲科を卒業。声楽（歌曲・合唱曲）およびピアノ曲を主に手がけ、特に独唱曲「落葉松」（野上彰作詞、後に混声合唱、女声合唱・男声合唱に編曲される）は有名。

●フーゴ・ヴォルフ

Hugo Wolf

ドイツ歌曲は、フーゴ・ヴォルフ (1860~1903) に至って、ロマンの香り豊かな世界を展開することになる。ワーグナーに心酔したヴォルフは、極限の機能と声法とドイツ語による歌詞の見事な融和によって、歌曲の世界に独自の斬新な表現を実現し、ゲーテやメーリケ、アイヒェンドルフなどの詩に夥しい数の歌曲を作曲した。彼の作品はほとんどが歌曲で、純粋な歌曲の作曲家として、シューベルトとならぶドイツ歌曲の巨星となった。

歌曲集《ミニヨン》(全4曲)

Mignon

『ミニヨン』4曲は、文豪ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』の中の詞からとられた。

16 語らずともよい

Heiss mich nicht reden

短いながら、巧みな和声法と詩との対比が、幅広い表現を可能にしている。冒頭のフォルテの和音がミニヨンの複雑な胸を表し、心の推移がピアノの和声によって巧みに綴られていく。

「私に語れと命じないでください。それを秘密にしておくのが私の義務ですから。できることならばすべてを語りたいのです。でも、それができないのが私の運命なのです。ときがきて、明るい太陽が暗い闇夜を追

い払うように、その秘密もいつかは明らかになることでしょう。かたく閉ざされた岩でもその心の内を開き、奥に秘めた泉を惜しむこともなく、湧きださせるのですから」

17 ただ憧れを知る人だけが

Nur wer die Sehnsucht kennt

シューベルトとチャイコフスキーもこの詩に作曲している。遠くの恋人への思いと、不安に駆られた心境を描いている。下降音形と曖昧な調性はシェーンベルクの12音音楽を予感させる。

「ただ憧れを知る人だけが、私の悩みをわかるのです。あらゆる喜びと楽しみから、ひとり隔てられ、私は遥かかなたの青空を仰ぐ。ああ、私を愛し、わかってくれる人は、遠いところにいる。そう思うと胸がさわぎ、つらい思いに駆られるのです。ただ憧れを知る人だけが、私の悩みをわかるのです」

18 もうしばらくこのままの姿に

Heiss mich nicht reden

So laßt mich scheinen

ピアノのバスの一貫したシンコペーションは、嘆きのために年老いたミニヨンが死に旅立つ舞踏を思わせる。内声の半音階進行が揺れ動く心境と、静寂が支配する天国への憧れを思わせる。

「もうしばらくこのままの姿にしておいてください。この白い衣装もとり上げないでください。もうすぐ私は

美しいこの世から、あの世にいくのですから。あの世で横になって静かにしていれば、新しい黄泉の国にも慣れることでしょう。そうすればこの美しい衣装も、ベルトも冠もすべていらなくなります」

「天に昇るときは、男女の区別もなく、からだは清められ、衣装もまといません。現世の苦勞もなく生きてきましたが、心の病だけは深く傷つき、あまりにも速く年老いてしまった。またふたたび、永遠の若さを与えてください」

19 君よ知るや南の国

Kennst du das Land

ベートーヴェン、シューベルト、シューマン、トーマ、チャイコフスキーもこの詩に作曲している。3部からなる詞にピアノと歌が絶妙な転調やリズムの変化を見せる。1888年の作。

「ご存知ですか、レモンの花咲く国を。緑の葉陰にはオレンジが実り、青い空から優しい風がそよぐ国を。その国へ、その国へ！ あなたと2人で行き、明るい広間と、静かな部屋、大理石の立像はつねに優しく、穏やかなまなざしで私を見下ろしてくれる。ご存知でしょう？ その国へ、その国へ！ あなたと2人で行きたいのです、ああ優しい方！」

「ご存知ですか、山間にかかる雲の掛け橋を、ロバが喘ぎながら登る、雲がかかる山道を、龍が住む、太古

の洞窟を、切り立つ断崖から流れおちる瀧を。その国へ、その国へ！ さあ行きましょう、ああ、父のようなあなたと！」

●アンコール

20 成田為三：浜辺の歌

成田為三 (1893~1945) が東京音楽学校 (現在の東京藝大) に在学中、林古溪の詩に作曲した歌で、戦前から広く愛唱されている、日本歌曲の名作。白石敬子の故郷、湘南海岸をイメージして書いたといわれていて、石碑がある。

21 ジーツィンスキー：ウィーン、わが夢の街

Rudolf Siczynski: Wien, du Stadt meiner Träume

ウィーンの民謡といわれるほど広く親しまれているこの歌には、ウィーンへの憧れと郷愁が込められている。ポーランド系の作曲家ルドルフ・ジーツィンスキー (1879~1952) は市役所に勤めていた役人で、この作品は20世紀初頭に発表されると、瞬く間に世界的に有名になった。ゆったりとしたワルツのテンポで、ウィーンなまりのドイツ語で情緒たっぷりに歌われる。「私のこころはいつもウィーンに憧れている。そこは私の故郷。遠く離れていても、懐かしさは尽きない。そして、遠くから歌が聞こえてくる。ウィーンこそわが夢の街。私が幸せになる街、それがウィーン！」

プロデューサー・ノート ■井阪 紘

白石敬子さんは、1976年に日本人としては初めてウィーン国立歌劇場に専属歌手として契約した歌手である。それ以前には大橋国一のようにウィーンの音楽大学で学んで、グラーツの歌劇場の専属を勝ち得た人もいたが、白石敬子さんの業績は快挙と言ってよい。

私は1974年頃からウィーンでレコーディングを始めたから、彼女の活躍は横目で眺めていたが、特に接点はなく、時折、ウィーンの日本レストラン、そう、当時ジンガーストラッセの南にあった「レストラン東京」あたりですれ違ったことはあったが、声をかけて話をすることはなかった。

白石敬子さんを録音するようになったのは、彼女がウィーンを引き払って日本に帰ってきて、地元の藤沢オペラで歌うようになった後の、2000年からである。

彼女がウィーン・フィルのクラリネット首席のベーター・シュミードルにレコーディングについて相談したところ、「日本で録音するのなら、ウィーンの音楽をよく知っている彼しかないのではないだろうか？」と薦められたらしい。

録音する前に、初めて会った時から、録音活動をするのなら、すべてに最高の表現方法求めて厳しい仕事になりますよ——と念を押してスタートした。

2000年、シュェーベルトで始まったすべての録音でピアノを弾かれたのは、ご主人の白石隆生さんだった。一枚一枚の録音で、2人の光るキャリアに傷

をつけるような仕事をさせてはいけない、という考えが私の頭にあった。以来、2008年のマラー歌曲集までに7枚のアルバムを制作した。さらには、紀尾井ホール等で続けてきたリサイタルも録音し、ファンの皆様に記念として手渡すため、2012年までに4枚のライブ・アルバムを自主制作された。

レコーディングの積み重ねで、白石さんが綿密に追求し続けたその歌唱は、どんどん声の芸術の奥義とも言える高い表現力を持つようになった。その昔、エリック・ヴェルバに就いて学んだことが、次々と確認できるようになった、と彼女は確信を持って語る。

ここ数年の病気との葛藤の中でも、歌う目標は変わることなく、一步一步と深まっているのが舞台から聞こえてくるようになった。

2017年、今年のリサイタルは、その極みであり、彼女の自由で明快な歌唱の頂点にきたことを示す素晴らしいコンサートであった。それゆえに、このライブはカタログに加えてもいいのでは……と彼女に勧めることになったし、このコンサートこそは、2015年、いつもピアノを弾いていたご主人の白石隆生さんの突然の逝去に捧げる追悼になったに違いない。

隆生さんに代ってピアノを弾かれた室井拱さんも、ヴェルバにリートの伴奏を学ばれた俊英。彼女の素晴らしい共演があって、このライブ録音は貴重なものになったと思っている。

プロフィール

●白石敬子 (ソプラノ)

Hiroko Shiraishi, soprano

藤沢市出身。幼少よりピアノとバレエを学ぶ。横浜市立桜丘高校の合唱部で全国大会に出場。武蔵野音楽大学音楽科卒業・同専攻科修了。オペラ『フィガロの結婚』の伯爵夫人でデビュー。国際RC財団奨学生としてウィーンに留学。ウィーン国立音楽大学を最優秀首席で卒業。グロスマン、ギューデン、スワロフスキー、ヴェルバ、ショルム、グアリーニ(ミラノ)に師事。

1974年、ヴィーニャス国際コンクール優勝(スペイン)、ミュンヘン国際コンクール第2位(ドイツ)、ヴェルディ国際コンクール第3位(イタリア)、第1回モーツァルト国際コンクール入賞(オーストリア)。

1976年、日本人初のウィーン国立歌劇場の専属歌手として契約、指揮者のエレデ、バクナー、シュタイン、ドホナーニ、アルブレヒト、宮廷歌手のニルソン、アローヨ、コソット、ルートヴィヒ、ドミンゴ、シュライヤー、アライサ、アトラントフ、ベリー、カプツァリ、ギャウロフ、ネステレンコらと共演。1980年、ウィーン国立歌劇場の日本公演《エレクトラ》でウィーン・フィルハーモニー管弦楽団と共演。名テノールのニコライ・ゲッダ、エヴァ・ランドヴァーとコンサートで共演。バルセロナ、ジュネーヴ、プラハ、



ライブツィヒなどの歌劇場と日本で《蝶々夫人》《ボエーム》《オテロ》《椿姫》《ファウスト》《リエントウ》《トゥーランドット》《虎月傳》《魔笛》等の主役を演じる。2002年、演奏活動35周年リサイタル(紀尾井ホール)、プラハ国立歌劇場の《蝶々夫人》で成功を収める。NHKニューイヤーオペラコンサートに連続出演。内外でのリサイタルは160回に及ぶ。

スイス・ロマン管弦楽団、ウィーン交響楽団、ライブツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団、NHK交響楽団、新日本フィルハーモニー管弦楽団、読売日本交響楽団、東京フィルハーモニー交響楽団、大阪センチュリー交響楽団、プロムシュテット、デ・ブルゴス、小澤征爾、若杉弘、尾高忠明らと共演。

ミトロプロロス国際オペラコンクール(アテネ・オリピック記念)、日本モーツァルト音楽コンクール、藤沢オペラコンクール等の審査員を歴任。オーストリア共和国褒章、国際RC財団学友賞受賞。

モーツァルト、シュェーベルト、シューマン、ブラームス、R. シュトラウス、ヴォルフ、マラーのCDはウィーンでも高い評価を受ける。2007年、2017年のリサイタル(紀尾井ホール)は皇后陛下のご臨席を仰ぎ、前者は『音楽の友』誌の年間コンサートベストテンの第1位に選ばれた。2017年には白石隆生との共著によるCDブック『ウィーン わが故郷の街』が出版された。

●室井 摂 (ピアノ)

Setsu Muroi, piano

桐朋学園大学ピアノ科卒業。2008年まで、声楽伴奏非常勤講師を務める。

ザルツブルク夏期講習会でE. ヴェルバのリートクラスを受講、フランドル音楽祭に参加し、全ヨーロッパに実況中継される。

歌曲伴奏法をK. リヒターに師事する。2004年E. アメリンクとJ. デームスのリートクラスを受講し、デーム



スより絶賛される。

ドイツ歌曲をライフワークとして、2000年より『歌曲の世界』シリーズを主催し、「作曲家の記念年」をコンセプトとして、昨年3月までに6回のコンサートを開催して毎回好評を得ている。

オペラのコレペティとして多くの団体の公演に参加し、コンサートやコンクールのピアニストとしても絶大な信頼をえている。

現在、昭和音楽大学及び大学院の声楽伴奏非常勤講師。

Hiroko Shiraishi | soprano

Hiroko Shiraishi made her first operatic debut as Countess in "Le Nozze di Figaro" in Tokyo. She was awarded the Rotary International Scholarship and studied at the Wiener Musikhochschule, where she graduated with Distinction. Her Professors included Grossmann, Swarowsky, Werba, KS.Güden, as well as Guarini in Milan. In 1974 she won prizes in distinguished international competitions in Munich (ARD), Barcelona (Viñas) and Busseto (Verdi), and began her international career in Austria, BRD, DDR, Yugoslavia, Spain, the Netherlands, Switzerland and Japan. In 1976, she became the first Japanese singer to be awarded a permanent contract with The Wiener Staatsoper, where she performed with conductors such as Dohnányi, Errede, Patané, Stein, Domingo, and G.Albrecht; and singers such as Nilsson, Arroyo, Ludwig, Cosotto,

Schreier, Jerusalem, Araiza, Berry, Ghiaurov, Nesterenko and many others.

In addition to performing in the 1980 Japan tour of "Elektra". She was invited to major theatres including Innsbruck, Geneve, Prague, Barcelona, and Leipzig, where she played the title role of "Madame Butterfly" as well as Mimi in "La Bohème." Her other successful repertoires include roles as Countess Rosina, Pamina, Margarethe, Frau Flut, Violetta, Desdemona, Liù, Turandot and Chrysothemis. She has performed in many orchestra concerts, with the Vienna Philharmonic Orchestra, Ensemble Kontrapunkte, Vienna Symphony Orchestra, ORF Symphony Orchestra, Bavarian Radio Symphony Orchestra, Gewandhausorchester Leipzig, Orchestre de la Suisse Romande, NHK Symphony Orchestra with Blomstedt, New Japan Symphony Orchestra with Seiji Ozawa, and Yomiuri Nippon

Symphony Orchestra with De Burgos. Her performance with Nicolai Gedda with the Tokyo Philharmonic Symphony Orchestra was reviewed as "long to be remembered."

Her performance in 2003 as Madame Butterfly in Prague National Theatre was received with outstanding critiques. She also has been making active performances on television and radio, including ORF, SDR, ZDF, ARD and NHK. She has performed in recitals which total in excess of 160 in Japan and Europe, including Austria, Spain, Germany, the Netherlands, and Yugoslavia.

In 2007, her recital in Tokyo was performed with the presence of Her Majesty the Empress of Japan, and the Ambassador of Austria, Stefan-Bastl. She has a uniquely wide-ranged repertoire, ranging from Passions, Masses, Vespi, Cantatas, Requiems, 9th Symphony (Beethoven) and Lieder by Bach, Hendel, Haydn, Mozart, Beethoven, Schubert, Schumann, Mendelssohn, Brahms, Verdi, Tosti, Faué, Mahler, R. Strauss, Schönberg, Berg and Robert Schollum. Her Solo CD recordings include Lieder of Schubert, Schumann, Richard Strauss, Mozart, Wolf, Brahms, Mahler, and 5 live recordings of her recitals.

Recording Producer: Hiroshi Isaka
Recording & Editing Engineer: Yasuhisa Takashima

Recording Date: October 21, 2017
Recording Location: Kioi Hall, Tokyo [Live Recording]
Instrument: Steinway & Sons
Piano Tuner: Naohiko Kurata
Cover Design: Yoshihiro O'hara

Technical Information

Microphone: SCHOEPS CMC-56U x 1 (vo)
SCHOEPS CMC-52SU x 2 (main)
Microphone Amplifier: John Hardy M-1
(Output of amplifier was connected directly to A/D converter)
A/D Converter: GRACE DESIGN m201
Recorder: MERGING Pyramix 6
Sampling Bit Rates & Frequency: 24 bit / 192 kHz
Editing and Mastering System: MERGING Pyramix 6

【取り扱い上の注意】

●ディスクは両面共、指紋、汚れ、キズ等を付けないように取り扱って下さい。●ケースを破損しないように、ディスクは中心の凸部を押しながら静かに取り出して下さい。●ディスクが汚れたときはメガネふきのような柔らかい布で内周から外周に向かって放射状に軽くふき取って下さい。レコード用クリーナーや溶剤等は使用しないで下さい。●ディスクは両面共、鉛筆、ボールペン、油性ペン等で文字や絵を書いたり、シール等を貼付しないで下さい。●ひび割れや変形、又は接着剤等で補修したディスクは、危険ですから絶対に使用しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。

【保管上の注意】

●直射日光の当たる場所や、高温・多湿の場所には保管しないで下さい。●ディスクは使用後、元のケースに入れて保管して下さい。●プラスチックケースの上に重いものを置いたり、落としたりすると、ケースが破損し、ケガをすることがあります。